

多床室を全室個室に改修 感染防止とその人らしい暮らしを実現

まちかどホームすずらんの取り組み

新型コロナウイルス感染症の拡大期、多床室が多い従来型施設では、全室個室の施設以上に、感染防止のために緊張した日々が続きました。そうした中、まちかどホームすずらん（特養、大阪市西成区）では、補助金も活用しながら多床室を個室に改修する取り組みを進めました。2022年に1年間かけて工事を遂行。ベッド数は105床から72床に減りましたが、自分の居場所ができて、利用者の皆さんの喜びも大きいようです。

補助金も活用し個室化を進める

全室ベランダに面した明るい室内。「周囲の人に気兼ねせず、自分の気持ちを伝えられる環境づくり」をコンセプトに、同施設の個室



上・家族の写真などを飾った居室でくつろぎながら、職員と話す利用者。右・ベランダからの陽差しが明るい改修された個室。

改修工事は進みました。「自分らしく暮らせ、かつ感染症の拡大を防いだり災害時に適切に対応したりするには、個室化が不可欠と考え、2020年頃より検討を始めました」と施設長は話します。

改修のために申請したのは「大阪市介護施設等における新型コロナウイルス感染症拡大防止対策支援事業補助金」。国が20年度に「介護施設等における感染防止対策に関する支援」※1として、地域医療介護総合確保基金※2をもとに創設した事業です。

自分が主人公となる居場所に

改修のため申請したの要件を満たすのはスペース的に12床にとどまったため、他は自己資金と借入金で工事をしました」と施設長。33床分の工費は約1.5億円でした。

この補助金※3を活用して22年1月～3月にかけて12床を個室に改修。4月～12月は自己資金や借入金で33床を改修しました。

工事期間中は騒音等で苦情を訴える利用者もいましたが空室に移ってもらったとして乗り切りました。

応援隊受け入れ施設懇談会を開催

長期休暇取得の悩みも吐露

7月14日、応援隊受け入れ施設懇談会をオンラインで開催しました。外国人職員を受け入れての施設側の困りごとなどについて意見交換を図りました。

3グループに分かれてディスカッションを行いました。応援隊が面談で遭遇するケースに腰痛の訴えがみられます。その対策として「介護用具を導入、ノーリフトケアを推進」「夜勤を外したりに腰に負担の少ない業務に代えたりして様子を見る」「コルセットの使用」「医療機関受診を勧めている」な

どの意見が寄せられました。一方、外国人職員を受入れるための施設としての難しさとしては、「同一労働同一賃金だが、書類作成などでは日本人職員に負担がかかっている」という声も。また、一時帰国の際の長期休暇を認めてはいるものの、「人手不足が続いている。外国人職員に自分が休むことで、

他の職員に迷惑をかけるという意識は希薄」といった厳しい意見もありました。介護現場に限らず職場が国際化する中、働き方や休暇取得の考え方の変革が、私たち日本人の側にも求められるのかもしれない。

懇談会参加施設

- ケアホームちどり
- 宝塚ちどり
- ナーシングホーム智鳥
- 中山ちどり
- なごみ
- 博愛の園
- ふれあいの館しおん
- みなと弘済園

カレンダー

10月～1月

- 10/6(金) 介護職員研修「リスクマネジメント」
- 10/7(土) 応援隊ミーティング
- 10/24(火) 理事会
- 11/18(土) 介護職員研修「認知症ケア」
- 11/28(火) 介護職員研修「不適切ケア」
- 12/2(土) 第3期応援隊養成講座(～16日)
- 12/29(金) 事務局冬季休暇(～1月8日)
- 1/27(土) オンブズマン研修会

ご寄付いただきました

- 蘆田智子、井川和代、大野富子、緒方しのぶ、岡田千鶴子、川本敏久、木下洋子、後藤田慶子、小林加代子、阪口恵美子、澤田幸子、篠崎敦子、竹内かほる、豊島久美子、中下吟子、西澤悦子、寝屋川十字の園、秦康弘、坂東美子、福山日出代、藤本委扶子、布施千草、水上義博、守美枝子、山下景子、吉岡淳子(以上、敬称略)

改修で居住フロアの3～6階に各18室が完成。居住費は多床室(基準費用額1日855円)から従来型個室(同1171円)になったことで若干アップしましたが、改修前から入居の利

※1 新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、①多床室の個室化改修、②簡易障圧装置の設置、③ゾーニング環境整備、に関する費用支援として設置。①は21年度予算から実施。今年度までの採択件数は、大阪で30件(うち特養12件)。
※2 消費税増税財源を活用し14年度に創設し、都道府県に設置。都道府県は計画に基づき事業を実施。
※3 21年度の個室化改修の補助金は1定員97・8万円。

用者はこれまで同様多床室の料金とすることで本人・家族の同意を得ました。「経営環境は厳しいですが、入居やショートステイの回転率、外注費等を見直すなどして工夫しています」と施設長。「貧困・差別など厳しい境遇を経て入居した人も少なくないが、ファイナルステージはここで心豊かに暮らしてもらえたら、と思っています」

2023年度 定時総会を開催

6月18日、第24回定時総会をドーンセンターで開催しました。出席者は24名（運営委員28名のうち会場10名、オンライン1名、委任状13名）。第1号議案（22年度事業報告）、第2号議案（同決算報告）、第3号議案（役員選任）が承認されたほか、23年度事業計画および事業予算の報告が行われました。

秦康宏運営委員の司会で始まった今年度の総会。三木秀夫代表理事が今年度大阪弁護士会会長に就任し、多忙を極めるため、定款に基づき山田裕子副代表が代表代行を務めることとなり、挨拶を行いました。

堀川世津子事務局長が第1号議案で22年度の取り組みを総括。第2号議案では水上義博副代表理事が「助成金の確保や外部評価事業の収益増で、127万円の黒字決算となった。3年連



議長を務める實業陸寛理事

続の黒字である」と報告しました。続いて荒木康弘監事が監査結果を報告。第3号議案の役員選任も含め、全議案は満場異議なく拍手によって承認されました。

23年度事業計画は堀川事務局長がオンブズマン活動の再開などを説明。事業予算は「収入798万円・支出994万円を見込んでい

【2023年度～25年度役員】

代表理事：三木秀夫
副代表理事：水上義博
山田裕子
理事：浅野幸子・小林弘法・篠崎敦子・田中嘉明・秦康宏・藤谷忠昭・藤本委扶子・實業陸寛・堀川世津子
監事：荒木康弘・那須良太

認知症になっても 「自分らしく 幸せに生きる」には

外部評価調査員勉強会

8月19日、グループホームみやびの前管理者、藤田昇三さんを講師に勉強会を開催。約20年間現場で認知症利用者

自由を奪うことの恐ろしさ

認知症の人から学んだことは多々あります。例えば自分自身の死生観、「自分を抑制できなくなるむき出しの本能、笑うことやおしゃべりの重要性、口で食

とは何か」といった哲学的なこと。そして、そうしたことを考え続ける介護職という仕事の面白さも、存分に学びました。

一方で、「自由を奪うこ

「痛い」こころも伝えてほしい

調査員は事業所訪問時に、管理者にどんなホームにしたのか尋ねてみてください。まずは抽象的な答えが返ってくるでしょう。

「それはどんなことですか」「それを実行するために何をしていますか」と具体的な質問を投げかけてみる。3つほど質問したらその事業所の本気度がわかります。

また、施設にとって「痛いところ」も伝えてほしい。事業所の人たちも、調査員と話をすることで、気づかないところが見えてきたりして考えが変わったりすることがあると思うのです。

そして「ここで利用者さんはどんな暮らしをしているのか、1日に何回ぐらい笑っているのだろう」と、興味を持ち、ワクワクしながら訪問することを忘れないでほしいと思います。

定時総会終了後、第65回O-ネットセミナー「日本の『新しい隣人』ベトナム」を開催しました。講師はベトナムист・クラブ代表の富田健次さん。南北を逆さにし、アフリカ大陸とヨーロッパ大陸を中央に据えた世界地図をもとに、民族の移動と歴史の流れをダイナミックにとらえ、普段見聞することのないユニークな視点から、ベトナムと日本の生活文化に触れるお話を伺いました。参加者は会場37人・オンライン15人（スタッフ含む）。質疑応答では質問も相次ぎ、ベトナムへの関心の高さがうかがわれました。

第65回O-ネットセミナー 日本の『新しい隣人』 ベトナム



富田健次ベトナムист・クラブ代表

人類は地図の中央にあるアフリカで誕生し、中東からヨーロッパやインドへ、あるいは中央アジアや東アジアへと広がりました。この反転した地図を使えば、そうした人類の拡散経路や、「西側諸国」である欧米の距離の近さ、「極東」である日本の位置、大国のインドと中国に接する東南アジア諸国の位置関係などがとも見えやすくなります。民族の移動や文化の伝播という歴史の流れを踏まえ

その後インドや東南アジア・日本へ広がった稲作は生活文化を大きく変えました。稲作のための地べたに這いつくばっての生活——これが農耕民族の原点です。食事も床に座って車座に

を受けてきました。東南アジア諸国の祖先はインドからの移住民だけに、インド文化の影響が濃い。しかしベトナムは例外です。中国と国境を接する同国では紀元前から約千年間、中国の支配下にあり



藤田さんの話に耳を傾ける調査員の皆さん